

〔提 言〕

看護学の今後—COE 拠点の採択をきっかけに—

千葉大学看護学部

石垣 和子

2004年の年明けとともに、看護学もようやく黎明の時期を脱しつつあるように感じるこのごろである。

筆者の所属する部局は、昨年21世紀COEプログラム拠点として採択された。他の2大学に認められた拠点と併せて3つの看護学としてのCOE拠点へ、国から毎年約3億円の研究費・人材育成費が投入される。次のCOE募集の予定される5年後に「医学系」というくくりの学問群の中で同じ結果が果たして得られるだろうかと考え、黎明期の最後に、これから頑張れと周囲から押されているようにも思える。

このようなことを考える一因には、この日本家族看護学会の活動を通じて感じとれる日本の学問界の中での看護学の扱われ方の変化がある。看護学は、日本学術会議の中で確実に知名度をあげ、座る椅子に手が届きそうなところまで来ている。

その背景としてここ約10年の看護系学会数の伸び、各学会の会員数の伸びは著しいことがある。言い換えれば、内実として看護学研究者人口の裾野が広がり、結果として頂上が高くなったということであろう。我が日本家族看護学会も当然そのような学会の一つである。日本の看護学研究者人口増には、看護系大学の増加が関係していることはもちろんであるが、それと並行して実践的研究者がはじけたように増えているのではないだろうかを感じる。そして、他の学問の方法論を借りて研究せざるを得ない時代に

別れを告げ、看護を知るものが独創的な方法で自らの真理を探究する端緒についたといえる時に至ったのかとも思える。看護学の外からもそのことが感じ取れ、また看護学が自立することへの期待もあってCOE拠点が3つも誕生したのではないだろうか。

実践的研究者に支えられて、これからが真に看護学の内実が形成されていく時代となるであろう。それは、看護実践の中にこそ看護学の素材が転がっており、それらは実践者の視線でなければ見えないものであると思えるからである。家族看護学も然りである。押し上げられて頂上が高くなった現象に目を奪われていては、ここまでの努力が台無しになる。また、家族看護学は、看護学の中でももっとも新しい学問領域であり、実践者の育成にも力を注がねばならない段階にある。看護学は、多くの学問の中で学問としては最も未熟な段階にあることを肝に銘じ、看護学の将来を担う実践的研究者の活躍を支援し、また、それらの活躍を学際的な視点を持って学問として体系化することを教育研究機関にいる研究者が行うことを支援していくことが必要であろう。

COE拠点としての研究が動き始め、来年以降に向けて加速したいという思いの日々であるが、果たして満足する成果に結びつくであろうかという不安にも駆られる。看護学が社会的に認められれば認められるほど、きつときびしい「一人前扱い」が待っているように思える。